

## 国際的サクセスストーリー：

### 早期言語習得についてわかっていること

ミリアム・メット  
国立外国語センター(米国)

外国語習得の重要性に焦点を当てたシンポジウムで、講演ができたことをとても光栄に思う。母国アメリカでは、世間一般の人々や教育関係者と、外国語教育、特に早期言語教育に関して話し合うことは容易ではない。

今日の講義では、現代の若者が成長し、社会人として、市政、社会、経済、そして、政治の領域で責任を果たすためにはどのような準備が必要なのかなど、将来に目を向けた話をする。日本もアメリカ同様、保護者や教育関係者が、学校カリキュラムの様々な側面について懸念を抱いている。保護者と教育者の両者とも、読書、数学、科学は子どもたちの将来にとっても重要であると感じている。同時に、実践的に使える程度の外国語力を身につけておくことも更に重要視されている。

なぜ、外国語習得や子どもたちの将来を心配する必要があるのだろうか。なぜ、言語教育が重要なのか。これらをふまえて、下記のようなことについて講演する。

- なぜ、外国語を学習するのか。
  - なぜ、外国語教育を早期に始めるべきなのか。
  - 早期言語習得に関して反対意見が存在するが、それは何か。
  - 言語習得において、どのような要素が効果的であるか。
- まず、なぜ、他言語習得が重要であるかを説明する。言うまでもなく、今日の教育は明日の世界への準備である。現在の子どもたちが、世界で活躍する頃の世界はどのようになっているだろうか。
- 未来の世界像を予言することはできないが、現在子どもたちが生活している世界とはかなり違った世界になっているだろう。世界が産業基盤経済から情報サービス経済に移行していく事実を、誰もがどこかで読んだことがあるだろう。
- 私たちが、現在、当たり前としている生活の利便の大半は、30年前は存在していなかった。今の子どもたちは、私たちの世代が育った世界とは全く違った世界で生活している。
- アメリカ人としての私が、日本の子どもたちに自分の母国語である英語を学習すべきであると提唱するのはためらいがある。その一方で、現実として、今の子どもたちが指導的立場や社会人として活躍する頃、英語が国際公用語として使用されているかどうかかわからないが、子どもたちは多言語を学習すべきであると考えられる。
- 多くの国々で、英語は世界の公用語として使われている。国をまたにかけて活動をする際、成功に導く鍵の一つは英語であると信じられている。現在、ビジネスや医療、科学の分野では英語が中心的役割を果たしている。英語力は、個人的な趣味、映画鑑賞、音楽鑑

賞、旅行などの楽しみも豊かにする。日本を含めたいくつかの国々では、優れた英語力が大学入学を有利にする。

英語は一番重要な言語であるか。どの言語を学ぶべきか。未来予測はできない。今日、英語は重要な役割を担っているが、将来どの言語が重要になるだろうか。未来のことを予言することができないのだから、子どもたちが英語のみだけを学習すべきであるとはできない。母国語以外の言語を習得し、言語習得のコツを身につけることで、外国語習得はより容易になることを理解した上で、世界中の子どもたちが数ヶ国語を学習すべきであると提唱すべきである。

日本、アメリカ、ヨーロッパなどどこに住もうが、経済の安定に言語が重要な役割を担っていることは明確である。国際レベルでの思考が重要視される中で、ビジネスは国内だけに留まらず世界規模で展開されている。ビジネスの領域で活躍する人々は、海外取引する機会がさらに増えている。言語や異文化理解できる能力は、海外市場でオープン取引システム、輸出システム、安定したエネルギー供給を保証する。

国際経済は、単なる販売業だけではなくっている。産業基盤経済からサービス基盤経済に移行している新しい国際経済では、ビジネスにおける言語の重要性が提唱されている。例えばアメリカ合衆国では、サービスの売上が国民総生産の大半を占め、国際貿易のなかで最も著しい成長を見せている。販売業は、買手が売り手側に理解されると感じることが成功をおさめる傾向にあることは明確である。

世界は、情報が重要な財産として考慮される情報産業社会へと移行している。経済の成功と安定は海外経済の現状や動向、あるいは、各国の研究や進展をきちんと把握していく能力があるかに左右される。

今日の世界では、環境保護、宇宙開発、郵便サービス、特許や商標関連、公衆衛生などの多様な分野で政府や企業は高い語学能力を持つ人材を必要としている。

現実的に、子どもたちの全てが国際取引、国際協力活動や国家安全保障の現場で活躍することはないだろうが、今の学習者たちの将来を予測できないという事実を認識し、受け入れなければならない。未来予測ができないのならば、できる限りの準備を子どもたちに施すべきである。その準備の一つとして、早期外国語習得を行うべきである。

なぜ早期に言語教育を始めるべきか。小学校レベルで言語教育を始めることがなぜ重要なのかについて3つの理由を提示する。

- 時間。
- 脳発達の研究。
- 早期言語教育の成果に関する研究。

言語教育を早期に始める1つめの理由は時間である。特に、実社会で使える程度の言語力を習得する場合にはかなりの時間がかかる。5歳で学習を始めた場合、必要な能力を養う学習時間が十分にあることは言うまでもない。13歳で始めた場合には、言語を向上させるためのそれまでの8年間を逃してしまっていることになる。この点については、言語能力向上に有効な要因を説明するとき詳しく説明する。

もう1つの重要な理由は時間、あるいはタイミングである。多言語学習、特に、早期に始めることは、知能や学習面において有効に働くとして広く実証されている。脳の柔軟性、数の計算や読み書きをする時に容易に表記文字の転換ができた能力、拡散的思考力やメタ言語意識力の向上、そして、高い言語能力の数値は、早期言語教育と相関関係にあると証明されている。

最近の脳の研究では、バイリンガル教育や言語教育が脳に与える効果に関する明察がなされている。幼児期の脳の発達研究によると、言語学習に必要な組織・機能はもともと脳に組み込まれているのである。全ての普通児は、直接的な指導をほぼ受けることなく比較的に容易に母国語を習得する。母国語を習得するための脳機能は、幼児期の第2言語習得にも機能する。成人しても、多言語習得が可能であることは事実だが、言語学習に使われる脳機能は、幼児期の習得を促進するために使われた機能とは異なる。数ヶ月前に発表された研究によると、2カ国語を操る人々は、脳の言語機能部分に関連した灰白質の組織をより多く持つ。灰白質は脳細胞からなり言語を早く習得すればするほど、その数が増えるか、もしくは大きくなる。この調査にあたった研究員たちは、調査結果から大人より子どものほうが、言語習得が容易であると推測した。

他の研究では、認知機能は第2言語学習やバイリンガルになる子どもにもある。2つの言語を家庭で学び、幼児期にバイリンガルになる子どももいる。境の中で新しい言語を学習し、バイリンガルになる子どももいる。

研究者は、子どもでもさえ、第2言語能力を得ることによって、認知的な恩恵を受けることになることと発見した。研究結果は、頭脳の柔軟性や創造的思考力、問題解決力、認知抑制手段などの分野においてバイリンガルの子どものたちが優れていることを証明した。さらに簡単に言えば、結果はバイリンガルの子どものほうがモノリンガルの子どもよりも、思考過程の上で優れていると示唆している。

研究者たちは、また、バイリンガル教育による長期的なメリットも発見した。バイリンガルイズムは、より効率的に制御された過程と関連していることと発表した研究者が、成人の知能制御の老化を遅らせる可能性があることを示し、中高年になってもバイリンガルであることの効果は継続して見られることを発表した。

一人のバイリンガルの大人として、ここで良い報告をしたい。親として、2カ国語に熟達することによる認知的利点がありますが人々の注目を集めていることがわかった。将来どのような道を選択するにしろ、早期から言語学習を始め、学校教育でその言語学習を継続することで、子どもたちは利益を得ることができる。それは単に、言語学習が子どもたちにとって良いからである。一般的に誤った見解が存在するため、このことを明確にする必要がある。誤った見解とは、母国語が定着していない子どもにも外国語を導入すると混乱が見られるということである。

実際に、多くの研究者がバイリンガルの子どもたちに関して浮上している疑問点を調査してきたが、その結果として、子どもたちは2つの言語で混乱することはないと結論づけることができる。研究者は、2歳児でも容易に母国語と外国語を区別することができることを報告した。

早期言語教育から得られる認知的効果に加えて、学習到達度への影響についても研究が行われた。研究では教科学習面にもよい影響が見られた。母国語の読み書きや算数を学ぶ

ための時間を言語指導に振り替える場合もあるため、このような結果が出たことに驚く教育関係者もいるだろう。外国語指導のために他の教科時間を減らしても、読み書き、算数などの成績に悪影響がないという研究結果が出ていることは、喜ばしいことである。

学校で外国語教育を受けている低年齢の学習者は、いくつかの研究から、学校で外国語学習をしていない子どもたちと比べて成績が良いことがわかった。ある研究では、読解、母国語能力、算数の結果を調査し、外国語を学習している子どものほうが学習をしている子どもよりも算数でさえ良い成績を残していることがわかった。

早期言語教育を主張する人々にとっても最も重要な事実は以下のことである。たとえ外国語を学習している子どもとそうでない子どもとの間に学業成績の差が見られなくても、外国語学習者は、そうでない子どもが学んだこととすべてに加えて、外国語能力を身に付けているため、より多くを学んだことになるのである。

これらの研究結果は、外国語学習に他の教科の時間を使う事で、十分に学習できなかつたり、他の教科の学習を妨げたりすることを心配している人々の意見を否定している。

講演の初めに提示した4つ目の質問について話をす。「言語教育で重要な事は何か。」もし学校に限られた時間と費用を外国語教育に投資するならば、言語学習に違いを生むと立証されてきた以下の要素を考慮に入れたプログラムを構築すべきである。

- 時間
- 学習濃度 (レベル、程度)
- 交流
- 実践的課題
- 異文化交流

言語学習には時間がかかる。学習者が表面的な会話 (挨拶や丁寧なお願ひ) 以上の熟達度に達するには時間が必要である。言語学習には、他者が話している内容がどのような意味なのかや、言葉の裏を理解できる高度な能力が必要である。「ありがたい」という言葉を使えるだけでは意味がない。「ありがたい」という目的で使うかによって、感謝の仕方も変わらぬ。異文化間でコミュニケーションをする場合、このことが大変重要になる。ここでは、学習者が通常獲得する技能よりはるかに高度な技能を必要とする。

効果的で役に立つコミュニケーション能力を発達させるには時間が必要である。高校から始め、2年間の学習で実践的な言語能力は得られれない。高校に入ってから数学や化学の勉強を始め、これらの教科を1年や2年勉強しただけで、エンジニアやIT社会で成功できるとは考えられない。学校教育で言語学習のために費やす時間は、数学や科学に投じる時間と同等であるべきである。

高い言語熟達度の獲得に長い時間をかけることも重要であるが、同時に、学習言語に毎日、あるいは、毎週接する時間があることも重要である。授業時間が短すぎたり、時間数が少なすぎたりすると、学習者が習得できることや次の授業まで覚えていないことも制限されてしまう。その結果として学習成果が見られれない。学習者は1年間で十分に学んだり覚

えたりすることができず、担当する教師は、毎年同じことを教えないおさなければならぬと感じている。学習者は初級レベルの内容を繰り返して学習していることになる。言語学習時間が制限されていても、学習時間は貴重である。教師が言語学習活動や熟達するための言語発達にさらに注意をすることで、その限られた学習時間はさらに価値のあるものになる。

限られた時間の中で言語を学ぶことは貴重な経験だが、学習の継続性や、言語能力の継続的な向上に注意を向けることにより、その価値は急激に上昇するのである。教授時間の効果的利用は必要不可欠であり、言語発達を導く潜在能力を掘り起こすために1分1分を貴重に活用しなければならぬ。

学習濃度は言語学習を左右するもう1つの要因である。努力ややりがいのある課題を辛抱強くやり遂げる意欲を学習者から引き出すような作業に取組むことにより、学習濃度が生じる。外国語学習を経験したものなら誰でも知っているように、新しい言語の習得には努力や粘り強さが必要である。

意欲、興味関心、持続性が重要であるならば、成人するまで待つより、早期に言語学習を実践するほうがより効果的である。低年齢学習者は意欲的で自己抑制心が低い傾向にある。子どもは、大人ほど基本レベルの言語の基礎学習を退屈に感じない。(例：色の名前、100まで数えるなど) 言語教育は歌やゲームを教えること以上の内容であるべきだが、歌やゲームは、低年齢学習者の意欲と興味関心を引き出すだけでなく、歌やゲームの反復がコミュニケーション能力の発達につながる架け橋となる。教師は、歌やゲームと第2言語習得との関連性を知っておくべきである。そして、歌やゲームで使われている言葉やコミュニケーションにおいて、どのように応用することができるかを活動の中で教えなければならぬ。

自分のアイデアを伝達すること自体が動機付けであり、興味深いものである。実力のある教師は、学習者に相互理解や自分の考えを伝達するために言語を使用することができ、また、やる気を起こさせ、意義深く、目的のある課題に取組ませる。

授業が情報技術を介して行われるのであれば、教師によって行われるのであれば、学習者にとって元来興味深いものである学習課題に取り組み姿勢を養う言語教育は、言語成長にとって最も基本的なことである。

アメリカにおいて、内容重視の(content-based)言語教育がますます人気を博している。この教育法では、学校のカリキュラムの学習内容は、外国語を通して教え、補強し、練習する。

例えば、イマージョンプログラムでは、1日の半分以上の指導を外国語で行う。トータル(全面的)イマージョンでは、まず外国語で読むことを学び、その後、母国語で学習する。イマージョン教師は、他の教師と同じカリキュラム内容を教える一般の小学校教師である。しかし、彼らは母国語で教えないのである。興味深いことに、イマージョンの子どもたちは、算数などの教科を母国語で学んでいない言語で学んでいるにも関わらず、標準テストではイマージョン外の子どもたちと同じかそれ以上の結果を出している。

内容重視の他の指導法は、1、2の教科を母国語ではなく外国語で教える。いくつかの学校で、美術や音楽、または、体育を外国語で教えている。またある学校では、理科の

すべてを外国語のみ使用して教えている。これらのプログラムでは、他の教科を削る時間を最小限に押さえないながら、学習言語に接する時間を増加させている。

内容重視の教授法は、低学年に対してより導入しやすいのである。低学年では学習内容が抽象的言語や読み書き能力をあまり必要としないため、授業内容と統合した意味ある言語使用を提供しやすいのである。

次に取り上げる要素は、「交流」である。交流が言語発達にとって極めて重要であるということは、多くの研究によって実証されている。子どもたちが学習している言語を使用するように構成された機会を数多く、そして、頻繁に持つことが大切である。他者が使う言語を聞いたり読んだり、また、意味や目的を理解したりすることに取組む。このことに関しては、低年齢学習者と成人学習者との間に違いは見られない。

実践的な課題は言語学習に影響を与えるもう1つの要素である。言語は学習者にとって現実的であり、理解可能であるべきである。そして、コミュニケーションの手段として言語を使用するためには、実生活に即した理由が必要である。学習者は、相手の話している内容を理解したいと思ったり、自分を理解してもらいたいと思ったりする実際的な理由を必要とする。つまり、惹きつけられ、やる気を起こさせようとするような題材について話し合うときや、また、意味や目的を持つ場面で言語を使用する必要がある。

従来の教科書では、青少年の実生活に関連した内容がほとんど見られなかった。あるフランス語のクラスで、13歳の子どもたちが2人組になって、質問したり答えたりしていたのを参観したことがある。注意深く聞いてみると、子どもたちは、「私の孫息子を知っていますか。」などのような質問をしていた。子どもたちは確かに交流をしていたが、この交流には、実際的な意義や目的が何も見られない。

上記の例のような教科書では、文法に重点を置いており、子どもたちの実践的な意義に焦点を置くものは非常に少ない。従来の文法学習書には、目的や現実味が欠けている。そのことを考えると、従来の文法指導法が学習者にとってあまり有効ではないということは、驚嘆にあたりないだろう。

低年齢の学習者に対しては、形式や意味に焦点を当ててしっかりと構造化された学習がより効果的であろう。

先程、内容重視の教授法について論じた。内容重視の教授法のもう1つの利点として挙げられることは、学校のカリキュラムから内容を統合することによって、言語学習が幼い子どもたちにとって現実的であり、また、興味深いものになるということである。内容重視の外国語学習活動を行った後に、文法学習を少しだけ行うことによって、構造化された学習を提供するだけでなく、意味や目的を備えた言語使用を可能にするのである。例えば、動詞の過去形を学習するとき、タイムラインに主要な歴史上の出来事を記入する。より近い(closer)より遠い(farther)最も近い(closest)や、より小さい(smaller)より大きい(larger)最も大きい(largest)などの比較形容詞は、太陽系の惑星の説明に取り入れやすい。

ここでもまた、教師は学習目標となる形式が導き出され、学習者が意味と形式の両方に注意して自己の意見を伝達することができるように活動を構成しなければならぬ。

完璧な文法や豊富な語彙力はコミュニケーションの助けにはなるが、それだけでは十分ではない。なぜなら、誰に向かって、どのように、何を伝えるかを知る能力や文化的理解

が言語を学ぶ上で中心となるからである。すでに頭にある母国語を、外国語の語彙と文法で単純に置きかえることはできないのである。

文化は言語を使用する実践の場である。コミュニケーションの規則を決定する。どのようになら文化が形作られ、自分の言葉が聞き手にどのように理解され、話し手がどのように理解されようか、意図しているかなどを考へる必要がある。文化は、何を、誰に、いつ、そして、なぜ話すのかを説明してくれる。学習者がこのことを学ぶ最良の方法は、学習言語を母国語として話す人々と直接的に、または、メディアを通して間接的に交流することである。

教師として長い間子どもたちに語彙や文法を教えてきた。初めて旅行に出かけたとき、驚くべき発見をした。現地の人と会話をしている、文法的不一致をおかしたとき、たとえばそれが大変大きな文法的不一致であったときでも、会話には問題が生じなかったのである。その一方で、大変小さな文法的不一致が、とても大きな問題を引き起こしうることも発見した。このことによつて、人々とコミュニケーションをとるため、必要とするものや欲しいものを手に入れるため、そして、現地の人々と良い人間関係を築くためには、文化的理解に長けており、知識を持っていることができるように自分の経験に反映させる必要がある。観察し、より深い理解を得ることができるようになる。その中には、教えられなければならない能力もある。学習者は、自分の文化と学習言語の文化の両方を熟知する必要がある。すでに獲得している知識や姿勢を考慮して、文章や文書、会話を解釈する能力を教える必要がある。つまり、新しい習慣や考え、価値観を学ぶ技術、そして、交流を成功に導くために知識や技術を使う能力を教えるなければならないのである。

言語や文化、国境を超えた交流はより一層当たり前になってきており、子どもたちには、これらの能力が求められている。学習者たちは文化の壁を越えて、良好な形で交流をはかせる必要がある。このような交流は、子どもたちが上記の能力を備えることによつてより可能となる。しかし、より重要なことは、子どもたちがどのように学習するかを学ぶ必要があるということである。文化間の観察や分析、交流は、国内外において、新しい文化を越えた出会いをすることによつて生涯を通して学ぶことができるのである。

最後に、教育者として、将来のために、言語や文化、国境を越えたコミュニケーションを成功に導く能力を子どもたちに備えることの大切さを強調したい。子どもたちの未来は、私たちが経験してきた過去や現在、そして、私たちが想像している明日とは違っているだろう。

未来の世界は、ただ単に私たちが想像する世界と違っているだけではないと言われている。つまり、未来の世界は、私たちが想像するどの未来とも違うだろう。しかし、現在私たちの教室に座っている子どもたちが、未来の公務員や、ビジネスマン、教師、医者、建築家、技術者、研究者となることは確かであろう。子どもたちはこれから、私たちが予想できないくらい、様々な場所でも多くの人々に出会うだろう。他国から、または、他国で出会う人々との交流をどのように成功させるかについて学ばば学ばず、子どもたちの生活や世界がより成功へと導かれていくことだろう。